

まえがき

日本語にたいする学習意欲と、日本語教材への需要は世界各地で高まっている。ことし(1990年)、わたしはオーストラリア、シンガポール、中国などアジア・太平洋地域のいくつかの国をおとずれる機会にめぐまれたが、どこにいても、日本語教育が本格的にはじまっていることを感じた。

かんがえてみればこれは当然のことであって、世界のなかでの日本がこれだけ顕在化してくれば、それにともなって言語学習への欲求もうまれてくるのだろう。こうした日本語問題について、わたしは、国際交流基金や国立国語研究所などの同僚や友人からこれまでおおくのことをまなんできたし、いくつかの事業には直接・間接にかかわってきた。

しかし、残念なことに、世界からのこれらの要求にたいしてわれわれ日本人はまだじゅうぶんにこたえてはいない。なによりも教師の数がすくない。日本語教師のための認定試験はあるけれども、それでは外国にでかけて長期にわたって日本語の教育に専念できるか、という、そういう人材はきわめてすくないのである。

さいわいなことに、現代という時代はさまざまな電気通信のための機器や手段がととのってきた技術社会である。もしも、教師が不足しているなら、その不足分のいくばくかは放送やビデオで代用できるだろう。いや、さらにいうなら、こうした技術によってつくられた番組は、通常の教室での授業にはできない利点もいくつかもっている。画面のなかには、教室ではみることのできないような素材やグラフィック表現もあるし、ビデオはなんべんでも反復学習ができる。

放送教育開発センターでは、このような方法による言語学習にどれだけの可能性があるかをさぐってみることにした。その発表と討論の記録がこの報告書である。この領域はまだはじまったばかりだから、参加された各機関はそれぞれに研究しながら行動し、事業展開をしながら研究する、という苦心を共有している。だが、この苦心と努力こそが、これからの日本語教育の出発点になるにちがいない。この記録の完成にあたって、参加されたおおくのかたがたのご協力に感謝するとともに、とりまとめられた放送教育開発センターの福田滋助教授にあつくお礼もうしあげる。

放送教育開発センター所長
加藤 秀俊